

第4回地球流体夏のセミナー

吉澤能政*

昨年8月3～5日の3日間、新潟県塩沢町の筑波大学石打研修所で第4回地球流体夏のセミナーが開かれた。地球流体という豊かな研究テーマにこれまで触れたことのなかった筆者が、学部学生に風と構造物の干渉という講義をすることになったのがきっかけで、風、気象、地球流体と目を開かれ、題材の面白さにひかれて第3回のセミナーに初参加したのであるが、そこで今回のコンビンナーに指名され、独断と偏見がコンビンナーの特権という木村竜治さんの言葉に力を得て門外漢ながらあえてひきうけた次第であった。

事務局担当の新野宏さんと相談してきめたテーマが「二次元乱流」で、回転系上の地球流体の特質を示すと共に、これまで臨界層、解の多重性と分岐、と続いてきたこのセミナーの流れに沿うものであり、同時に進行中である科研特定研究「乱流現象の解明と制御」との関連があり、前回の出席者のアンケートで希望が多かったことなど、いわば必然的にきまったテーマであるといえよう。とはいえ、セミナーの性格上内容をきびしく二次元乱流に限ることもなく、少しはずれていてもよいし、特に現在進行中の研究、萌芽の段階の話まで含めてよいということで、それがかえってこのセミナーの活力を高め、濃密な討論の基盤になっているように思われる。

今回のセミナーで意図したもう一つのことは、地球流体分野の若手研究者と、他分野の流体力学研究者との交流を小規模ながら考えてみたことである。これは地球流体の特質である回転、二次元性、成層などをとりあげ、少しちがった視点から解説したものをくみこむことで実現させた。具体的な題目は後に示すとして、大島耕一(宇宙科学研)、桜井健郎(京大・工)、里深信行(京都工繊大・工)、柳瀬眞一郎(岡山大・工)の諸先生にお願いし快くひきうけていただいた。どの講演も好評で、ある程度その目的は達成できたと考えている。

さて個々の講演の内容を紹介する紙数はないが、題目と講演者を記しておこう。

8月3日:「二次元乱流と地球流体力学」柳瀬眞一郎(岡山大・工)、「渦の対消滅によるエンストロフィーの散逸」神部勉(九大・工)、「海流の蛇行と中規模渦の発生」池田元美(ブリティッシュ・コロンビア大)、「ウィナー・エルミート展開による二次元乱流の研究」沢村光宏(京大・理)

8月4日:「数値解析による二次元乱流の研究」里深信行(京都工繊大・工)、「二次元乱流の立場からみた木星大気の研究」松田佳久(東京学芸大)、「成層流中の乱流拡散」大島耕一(宇宙科学研)、「超高速の回転流体の流れ」桜井健郎(京大・工)、「海底地形の変化で生ずる水面波の挙動」山田正(防衛大)、「エネルギー法について」早川典生(長岡技術科学大)、「NS乱流とMHD乱流」水島二郎(相模工大)・斉藤善雄(東邦大)

8月5日:「成層圏における乱流の役割」田中浩(名大・水圏研)、「成層圏乱流の実態について」山中大学(宇宙科学研)

このように二次元乱流を中心にしながらも多彩で充実した内容であった。スキーの石打というイメージとは大ちがいの猛暑の中のセミナーであったが、参加者の真剣な討論は気温以上の熱気で、2日目などはとうとう終了が夜半12時になった位である。とはいえこの種のセミナーでは、インフォーマルな討論、レクリエーションを通じての交流も重要な要素であり、そのため1日目夜の懇親会、2日目午後3時間の自由時間を設けたが、テニス、散歩、地球流体関連の16mm映画、討論など有効に活用してもらったようである。

若手を主な参加者に行っているため、経済的にはかなりの部分を自己負担にせざるをえないことが、この種のセミナーの有意義さとは別の問題点である。幸い今回については前回に続いて科研特定研究「乱流現象の解明と制御」(代表 京大・理 巽友正教授)から、総括班および各班から十数名の方の御参加をいただくという形

* Yoshimasa Yoshizawa, 筑波大学構造工学系。

で、御協力をいただいた。ここに記して御礼を述べさせていただきます。

最後にセミナー事務局は気象研究所の新野 宏さん、途中から海洋研究所の吉崎正憲さんに担当していただいた。実際の面倒な事務をすべてひきうけていただいた両氏に厚く感謝いたします。次回のコンピーナーは、関西

地区にお願いすることになり、阪大基礎工の井上良紀さん、京大理学部の新脇資郎さんにひきうけていただくことになった。このセミナーがこれからも益々盛んになり、学会とは少し異なる面から地球流体の学問の発展に貢献するよう祈って筆をおく次第である。



増田善信 著
気象と科学

草友出版, 1984年3月刊, B6判,
189頁, 1,500円

この本は今年4月気象庁を退官した著者の退職記念出版として刊行された。著者と親交のあった人々によって計画され、全国的な募金で自費出版される予定だったが出版社の協力を得て一般書店にも出るようになった。

著者は気象研究所での退官あいさつのなかで、V. ピアークネスの言葉を借りるならば、数値予報こそ“気象学を真の科学に”するものであると考え、数値予報を生涯のテーマに選ぶようになったとのべている。著書が求めた「科学の論理」は研究や気象事業にとどまらず天気予報や予報官の心構えにまで及んだ。著者が6期6年間つとめた全気象労組の委員長時代には指導の中心的な柱として「科学の論理」は鋭く貫かれた。

組合のオルグで職場へ来た委員長から数値予報をみっちり講義してもらった人も多いはずである。かくいう私もルーチン化されて間もない、いかにも大味な数値予報天気図を前に夜を徹して一対一で講義をうけた一人である。

有志による編集委員会は、研究から数値予報の開発、気象事業のあり方から労働運動の指導まで「科学の論理」を貫こうと主張し、主張しただけでなく実践した著

者の所論を選んで後に続く人たちに残そうとした。

「地球観測百年と気象事業の展望」は1983年7月全気象労働組合がおこなったシンポジウムの記念講演であり、この著書の3分の1以上にあたる。「科学の論理」に基づく気象事業批判と将来展望である。

「数値予報をきずいた人々」は気象学会機関紙「天気」1982年10月号「数値予報と数値シミュレーションの百年」の抄録である。

「弁証法的にみた数値予報」は『OMEGA』(オメガ)最終号(1974年4月)から採録された。

「科学と平和」は筑波学園都市で開かれた集会(1983年12月)の記念講演である。

「全気象労働組合と私」は本書のために新しく書きおろした5編の小文である。労働運動にとって科学的で正しい方針がどれほど大切かがわかり、著者の主張と人柄が最もよくでた文章である。

「私を変えた人—曲田さんの思い出」は誰にでもある生涯に決定的な影響力をもった人の思いを故曲田光夫さんに寄せたもので、故人の追悼文集『光雲』(1974年刊)からの再録である。

退職記念出版という制約から、著者の多方面にわたった所論の部分的な集約ではあるが、ひとりの気象学研究者の社会的活動で貫いた主張と実践の全体を知ることができる。

(岡林一夫)